《研究ノート》

西田幾多郎晩年の思索と『教行信証』

――学習院西田幾多郎博士記念館（寸心荘）蔵書調査報告――

親鸞仏教センター研究員　名　和　達　宣

はじめに

哲学者・西田幾多郎（一八七〇～一九四五　以下、西田）は、京都大学を停年退職後、鎌倉市姥ヶ谷に住居をえて、最晩年の夏冬をこの地で過ごした。その遺宅は、西田と夫人の没後、遺族（孫・幾久彦氏）より学校法人学習院（以下、学習院）へ寄贈され、現在は学習院西田幾多郎博士記念館――通称「寸心荘」――として、在世時の空気を今日に伝えている。

西田は晩年に迎えた太平洋戦争の只中、この場所で決死の思いをもって論文執筆に励んだ。西田の哲学が、若き頃の参禅体験に根差していることはよく知られており、自らも「背後に禅的なるもの」（23-73）[1]を認めている。その一方で、『善の研究』（一九一一年）以前より、親鸞思想にも深い共鳴を示していたことが、近年――いまだ周知の事実とはなりえていないものの――注目されつつある。特に最後の完成論文となった「場所的論理と宗教的世界観」（一

九四五年四月脱稿）は、「浄土真宗の世界観といふものを書いて見たい」（23-319）と思案するなかで書かれた「宗教論」であった。

現在、寸心荘には最晩年の西田の座右にあったとされる七十四部八十四冊が保管されている。そのなかでも、仏教関連の十一部十三冊のうち、親友・鈴木大拙からの献呈本五冊を除けば、その大半の四部六冊が浄土真宗に関するものであることは驚くべき事実である。[2] このたび、学習院の協力のもと、西田晩年の思索の底に流れる親鸞思想を発掘すべく、浄土真宗関連蔵書の研究調査を実施した。ここに、その一端を報告する。[3]

『教行信証』への関心と『聖典』への書き込み

従来、西田の真宗理解に関しては、著作のなかにその引用が見られるところから、『歎異抄』を中心に論じられてきた。特に初期の随想「愚禿親鸞」に「絶対的他力の宗教」の「極意」として引用された『歎異抄』跋文の「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり」（1-325）という言葉への共鳴は、晩年まで一貫しており、「場所的論理と宗教的世界観」のなかでも繰り返し言及されている。

それに加えて、晩年に入ると『教行信証』にも関心を寄せているという事実は見逃すことができない。一九四三年五月には、鈴木大拙の『浄土系思想論』（一九四二年）を通じて山辺習学・赤沼智善著『教行信証講義』の存在を知り、書簡に「君の本に「山辺、赤沼著　教行信証講義」といふものを引いて居らるゝが　これは如何なる書か、分り易きものにや　一寸拝借できないか」（23-94）と記している。二ヶ月後には、大拙から借用したようで、「山辺　赤沼の教行信証講義大変によろしい、あれなら私にもよく分る、あの本は今手に入らないか」（23-124）と書き送っている。その後、西田は実際に同書を入手しており、寸心荘蔵書のなかに名を連ねている。

『教行信証講義』（全三巻、以下『講義』）は最初、浩々洞出版部の無我山房から出版（一九一四年）され、その後、第一書房および平楽寺書店から再版された。西田の蔵書は平楽寺書店発行の十五版（一九四一年）である。全体を通

して目立った書き込みは確認できないものの、第二巻（信証の巻）の随所に読み込まれた痕跡が残る。[4]

さらに注目すべきは、蔵書のなかに見られる島地大等編『聖典　浄土真宗』（一九一九年初版、西田蔵書は一九三五年七版、以下『聖典』）の存在である（図1参照）。蔵書印付で所蔵されたこの『聖典』は、西田自身が日常的に用いていたと考えられ、外装の使用感が甚だしいばかりか、内部の至るところに書き込みや傍線、読み込まれた痕跡（手垢）を確認することができる（図2参照）。

なお、西田の蔵書への書き込みについては、しばしば第三者の手によるものの混在が指摘される。[5] しかし、本報告で扱う資料は、最晩年の西田が座右に備えていた書物が、遺族よりそのままの状態で寄贈されたものであり、一般には公開や貸出もされていないため、第三者の書き込みが混入した可能性はきわめて低い。また、同時代に書かれた論文の直筆原稿と照らし合わせてみても、その字体や習性（かな文字・くずし字など）が一致するため、西田本人の書き残したものと特定して間違いないであろう。[6]

そのなかでも特に、『教行信証』部分に書き込まれた内容は、『講義』の解説内容とほぼ重なるため、西田は『講義』を参照しながら『聖典』を読書していたと推測される

図1　西田愛用の『聖典』

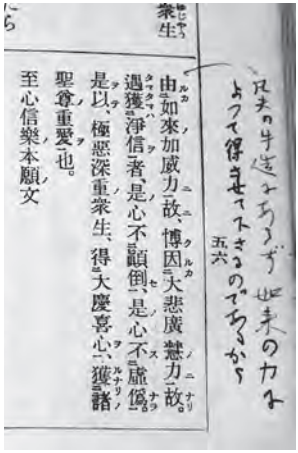

図2　「信巻」の書き込み

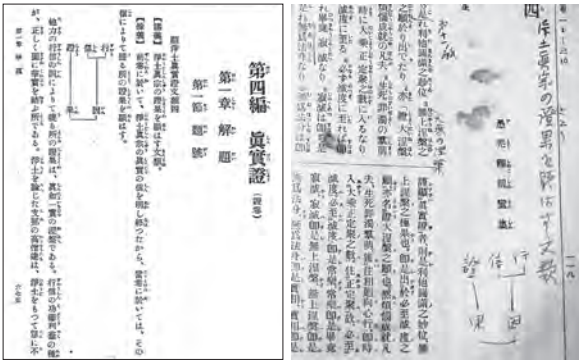

図3 「証巻」冒頭の書き込み（右）と『教行信証講義』の該当箇所（左）。同一の表が記されており、西田が『教行信証講義』を参照しながら『聖典』を読み進めていたことが分かる。

（図3参照）。そして、書き込みが集中するのが、「信巻」から「証巻」にかけてであるため、西田晩年の思索が親鸞の「信／証」と呼応していたことが窺われる。以下、『聖典』中の『教行信証』部分（①「信巻」、②「証巻」）への書き込み・傍線箇所を一覧で示す。

【凡例】

・『聖典』頁は、西田が使用した『聖典　浄土真宗』（明治書院）の頁、（　）内は東本願寺出版部『真宗聖典』の頁を示す。

・科文は、山辺・赤沼『教行信証講義』及び東本願寺出版部『真宗聖典』巻末付録の『教行信証』科文を参照。

・書き込み・傍線が見られた箇所の『聖典』本文は明朝体で示し、西田の書き込み（翻刻）は三点リーダー（…）の後にゴシック体で記した。（欄外の○印などは明朝体で指示）

・書き込みは、原文どおりを原則とした。ただし、くずし字は通行の字体に改めた。書き損じ、意味の取りにくい箇所には、本文脇に〔〕を付して注記した。明らかな脱字には『教行信証講義』の解説を参照のうえ〔〕を付して補った。

①『教行信証』「信巻」書き込み・傍線箇所一覧

『聖典』頁	科　文	書き込み・傍線箇所
二三二（二一〇）	別序【漢文】	・大聖…**釋尊** ・三經…**三部経** ・一心華文…**天親　淨土論**
二三三（二一一）	大信釈（大信の相）【漢文】	・心光（攝護之一心）…**如来の慈悲心**

二三四（二一一）	大信釈（信楽難獲）【漢文】	・由如來加威力故…**凡夫の手造にあらず　如来の力によって得させて下さるのであるから**
二三五（二一一三）	『無量寿如来会』の文（大威徳者の文）	・廣大佛法異門…**極楽**
二三六（二一一四）	『論註』（巻下）の文	・實相身…**自證の大能力** ・爲物身…**救濟の如来**
二三六（二一一四）	『讃阿弥陀仏偈』の文	・乃し一念に暨ぶまでせん…**一念の信を得ば** ・至心の者…**阿みだ如来**
二三六（二一一四）	「序分義」の文	・未だ無き者有らず…**受けないものはない** ・凡數の攝に非ざるなり…**凡夫でない**
二三七（二一一四）	「散善義」の文（三心正因の文・至誠心釈・深心釈）	・頁の冒頭（欄外）に註…**三心　至誠心　深心　廻向発願心** ・「散善義」…**善導** ・「何等爲三」從り下「必生彼國」…**觀経** ・**「**「一者至誠心」…上部に印 ・必ず真実心の中に作したまえるを…**如来の作した** ×所趣求【欄外】…×**如来より与へて下さるその廻向があら**〔**は**〕**れて衆**

		生の願生となる ・眞實心…**如来の** ・「「二者深心」…上部に印
二三九（二一一八）	「散善義」の文（回向発願心釈）	・「「三者廻向發願心」…上部に印
二四〇（二一一八）	「散善義」の文（回向発願心釈）	・「待對之法」【傍線】
二四一（二一一九）	「散善義」の文（回向発願心釈）	・一の譬喩を説きて【欄外】…**白道ノ喩** ・中路に二河有るを見る【傍線】 ・一つの白道有り【傍線】 ・我今回らば亦死せん、住らば亦死せん〔中略〕仁者但決定して〔中略〕若し住らば即ち死せん…欄外上に印（括弧で括る） ・汝一心正念にして直に來れ【傍線】
二四二（二二〇）	「散善義」の文（回向発願心釈）	・善心微なるが故に「白道の如し」【傍線】
二四三（二二一）	「散善義」の文（回向発願心釈）	・彌陀の悲心招喚したまふ【傍線】 ・「廻向發願心」と名く【傍線】
二四四（二二二）	『往生要集』の文（摂取利益の文）	・又云く、我亦彼の攝取之中に在れども、煩悩眼を障へて見たてまつること能はずと雖も、大悲倦きこと無くして常に我が身を照したまふ、と【傍線】…欄外上に○印

二四四（二二二三）	総結	・爾れば、若は行。若は信、一事として阿彌陀如来の清淨願心〔中略〕非ざるなり、知る可し…欄外上に○印
二四四（二二二三）	三心字訓釈（問）	・問ふ、如來の本願已に至心・信樂・欲生の誓を發したまへり【欄外】…**三心一心問答** ・論主（「一心」と言ふや）…**天親**
二四五（二二二三）	三心字訓釈（三心字訓）	・「心」は卽ち是れ種なり・實なり×【欄外】…**種は因にて心の義**
二四六（二二二四）	三心別相釈（問）	・又問ふ「字訓の如き、論主の意〔中略〕云何が思念せんや【欄外】…**三心別相問答**
二四六（二二二五）	至心釈【漢文】	・至心則是至德尊號爲其體也【傍線】…**六字名号**
二四八（二二二七）	至心釈	・是を「至心」と名く【欄外】…**至心**
二四八（二二二七）	信樂釈	・次に「信樂」と言ふは【欄外】…**信樂** ・利他廻向之至心【傍線】
二四九（二二二八）	信樂釈	・必ず報土の正定之因と成る【傍線】
二四九（二二二八）	信樂釈【漢文】	・報土正定之因…**淨土へ生レル**

二五〇（二二二九）	『涅槃経』の文（迦葉菩薩品）	・若し信心を説けば則ち已に攝盡しぬ【傍線】
二五一（二三〇）	『華厳経』の文（賢首品）	・信は道の元、功德の母と爲す〔中略〕信は諸根をして淨明利なら令む〔中略〕信は能く永く煩惱の本を滅す、信は能く專ら佛の功德に向はしむ、信は境界に於て所著無し〔中略〕信は功德の爲に不壞の種なり、信は能く菩提樹を生長す、信は最勝智を增益す、信は能く一切佛を示現せしむ【傍線】
二五二（二三一）	『華厳経』の文（賢首品）	・信樂の心清淨なることを得ば【傍線】
二五三（二三二）	欲生釈	・次に「欲生」と言ふは【欄外】…**欲生** ・羣生を招喚したまふ之勅命なり〔中略〕故に「不廻向」と名くるなり〔中略〕利他眞實の欲生心を以て諸有海に廻施したまへり。欲生は卽ち是れ廻向心なり【傍線】
二五四（二三三）	『論註』（巻下）の文	・廻向に二種の相有り【傍線】、【欄外】…**廻向**
二五五（二三四）	助釈（白道四五寸釈）	・眞に知んぬ、二河の譬喩の中に「白道四五寸」と言ふは【欄外】…**白道四五寸**

二一五五（二三五）	「玄義分」の文	・横に四流を超斷せよ【傍線】…**他力不思議の力**
二一五六（二三五）	三心結釈（三心即一心）	・何を以ての故に、三心已に疑蓋雑ること無し、故に眞實の一心是を「金剛の眞心」と名く。金剛の眞心是を「眞實の信心」と名く【傍線】
二一五六（二三六）	三心結釈（信心・名号関係）	・眞實の信心は必ず名號を具す、名號は必ずしも願力の信心を具せざるなり【傍線】
二一五六（二三六）	三心結釈（大信嘆徳）	・凡そ大信海を按ずれば〔中略〕能く智愚の毒を滅するなり【傍線】、【括弧で括り欄外註】…**大信海**
二一六〇（二三九）	信一念釈（総標）	・然るに菩提心に就いて二種有り。一には竪、二には横なり。又竪に就いて復二種有り。一には竪超、二には竪出なり〔中略〕亦横に就いて復二種有り。一には横超、二には横出なり。〔中略〕横竪の菩提心、其の言一にして其の心異りと雖も、入眞を正要と爲し、眞心を根本と爲す【傍線】、【欄外】…**竪超　竪出、横超　横出**
		・信樂開發の時尅之極促…**住生ノ定マ（ママ）ル刹那ノ至極短イ時間**

二一六〇（二三九）	『大経』（巻下）の文（十八願成就の文）	・是を以て『大経』に言はく、諸有衆生〔中略〕乃至一念せん【欄外】…**×成就ノ一念結帰**
二一六一（二四〇）	信一念釈（経釈文自釈）	・五趣【欄外】…**五趣　地獄　餓鬼　畜生　人間　天上**
二一六一（二四〇）	信一念釈（経釈文自釈）【漢文】	・一心則清淨報土眞因也【傍線】
二一六三（二四一）	三心一心総結（三心結釈）【漢文】	・故に知んぬ、一心、是を「如實修行相應」と名く【欄外】…**三心一心總結**
二一六三（二四一）	三心一心総結（三心結釈）	・故知一心是名如實修行相應【傍線】
二一六三（二四三）	横超釈（義釈）	・一念須臾の頃、速に疾く無上正眞道を超證す。故に「横超」と曰ふなり【欄外】…**横超**
二一六三（二四三）	横超釈（義釈）【漢文】	・一念須臾頃速疾超證無上正眞道故曰横超也【傍線】
二一六四（二四三）	『大阿弥陀経』（巻下）の文	・横に五悪道を截りて、自然に閉塞す【傍線】
二一六四（二四四）	断四流釈（義釈）	・「斷」と言ふは、往相の一心を發起するが故に【欄外】…**断四流**

二六五（二四五）	真仏弟子（第三十三願、触光柔軟の願）	・我が光明を蒙りて其の身に觸るゝ者、身心柔輭にして人天に超過せん【傍線】
二七〇（二五〇）	真仏弟子（結釈）	・眞に知んぬ、彌勒大士は、等覺の金剛心を窮むるが故に、龍華三會之曉、當に無上覺位を極むべし【欄外】…**彌勒此土に入れ**（ママ）**龍華樹下に正覚を開く** ・等覺…**五十一位**
二七一（二五一）	真仏弟子（悲歎述懐）【漢文】	・誠知、悲哉、愚禿鸞、沈没於愛欲廣海、迷惑於名利大山、不喜入定聚之數、不快近眞證之證、可恥可傷矣…上欄に〇印

②『教行信証』「証巻」書き込み・傍線箇所一覧

『聖典』頁	科文	書き込み・傍線箇所
二九六（二八〇）	題号	・顯浄土眞實證文類四…**浄土眞宗の證果を顕はす文類**（さとり） 行 信 因 證 果
二九六（二八〇）	真実証（総標）	・無上涅槃…**大乗の涅槃**
二九六（二八〇）	真実証	・必至滅度之願…**第十一ノ願** ・往相廻向の心行を獲れば、即の時に大乗正定聚之數に入るなり〔中略〕無上涅槃は即ち是れ無爲法身なり〔中略〕然れば、彌陀如來は如從り來生して、報・應・化種種の身を示現したまふ【傍線】…欄外上に印（括弧で括る）
二九六（二八〇）	真実証（大証釈義）【漢文】	・「然者彌陀如來、從如來生、示現報應化種種身也…上部に印
二九七（二八一）	『大経』（巻上）の文	・咸く同じく一類にして、形異狀無し〔中略〕皆自然虚無之身、無極之體を受けたるなり【傍線】
三〇〇（二八四）	真実証（総結）～還相回向（総標）	・夫れ眞宗の教・行・信・證を案ずれば、如來大悲廻向の利益なり〔中略〕亦「還相廻向之願」と名く可きなり。『註論』に顯れたり。故に願文を出さず。『論の註』を披く可し【括弧で括り欄外註】…**還相廻向** ・一生補處【欄外】…**一生補処　一生を過くれば佛処を補ふべき等覚の位**
三〇〇（二八四）	真実証（総結）【漢文】	・必至補處之願…**第二十二願**

三〇〇（二八四）	還相回向（『浄土論』の文）	・出第五門【欄外】…**出第五門　果の五功徳門　門中、最後の園林遊戯地門** ・應化の身…**應化身　應身に同じ、應身佛、衆生の機縁に應して示し給へる仏身**

『教行信証』以外の読み込みと真宗関連書籍

以上のように、書き込みや傍線が集中して見られたのは、『教行信証』の「信巻」（「抑止文釈」前まで）及び「証巻」の前半（「還相回向」引証前まで）である。その他、一覧には示さなかったが、『教行信証』以外で傍線が確認できたのは、「自然法爾章」（一七五―一七六頁）の「義なきを義とす」という文言と、『安心決定鈔』本・末（六三一―六四六頁）の「機法一体」に関する一連の記述である。また、書き込み等は見られないものの、『歎異抄』には全体にわたって読み込まれた痕跡（手垢）が残っており、さらには『聖典』の栞紐（スピン）が跋文の「彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずればひとへに親鸞一人が為なりけり」の箇所（五五六―五五七頁）に挟まれているため、日常的に見開いていたことが推測される。

図4　曽我量深『本願の仏地』

加えて、寸心荘蔵書のなかには、鈴木大拙『日本的霊性』や務台理作『場所の論理学』（いずれも一九四四年初版、献呈本）、武内義範『教行信証の哲学』（一九四一年初版、献呈本）[7]といった身近な友人・教え子の著した真宗関連書籍、あるいは近代親鸞教学の礎を築いた曽我量深の『本願の仏地』（一九三三年初版、蔵書は一九三七年二版）が見られる。特に『日本的霊性』と『場所の論理学』には多くの傍線が確認できるため、西田最後の「宗教論」との関連性が窺われる。また、『本願の仏地』について西田は、西谷啓治宛の書簡（一九四二年八月十日付）のなかで「面白い」（23-35）と感想を述べており、一度借用した直後に自ら入手しているため、西田哲学と親鸞教学とに通底する課題を明かす手がかりとなる一冊ではないかと考える。

おわりに

このたびの調査によって、晩年の西田が積極的に親鸞の思想――特に善導「散善義」の引文、「三心一心問答」、「横超釈」、「真仏弟子釈」、「還相回向」等――を吸収していたことが明らかになった。今後は、これらの思索が最後の完成論文「場所的論理と宗教的世界観」において、いかなるかたちで具体的に論じられているかを掘り起こしていかなければならないであろう。

無論、同論文中に『教行信証』という書物名は明記されていない。しかし、そのことはかえって西田が『教行信証』の思想を血肉化し、自身の哲学において展開していたということの証左と言えるのではないだろうか。

以　上

註

（1）本報告中、西田の言葉は新版『西田幾多郎全集』（岩波書店、二〇〇三～二〇〇九年）から引用した。その際、出典は「巻―頁」の順に半角数字で表記した。

（2）寸心荘所蔵の浄土真宗関連書籍は、①赤沼智善・山辺習学『教行信証講義』第一―三巻、②島地大等編『聖典　浄土真宗』、③曽我量深『本願の仏地』、④武内義範『教行信証の哲学』の四部六冊。また、仏教書には分類されないが、務台理作『場所の論理学』も真宗に立脚した哲学書である。蔵書情報に関しては、『西田幾多郎全蔵書目録』（山下正男編、京都大學人文科学研究所発行　一九八三年）を参照。なお、目録のなかで『本願の仏地』は『本願の佛地義』（傍線筆者）と誤表記されている。

（3）本報告に掲載の図は、すべて学校法人学習院の資料提供により、写真は筆者が撮影した。また、このたびの調査に際し、同学の施設部施設課、ならびに西田幾多郎博士記念館の岡野浩氏（学習院大学文学部哲学科講師）には多大なる恩恵を蒙った。この場を借りて御礼申し上げたい。

（4）筆者が閲覧した印象としては、「信巻」中の「回向発願心釈」（二河白道の譬喩）と「横超釈」の箇所に読み込まれた痕跡が色濃く残っている。

（5）例えば、京都大学大学院文学研究科図書館に所蔵の西田文庫には、本人の「書き入れ本も多い」（同館ホームページ参照）とされるが、その一方で所属の学生・院生等への閲覧・貸出も行われているため、かねてより後学の手による書き込みの混在が指摘されている。

（6）西田の直筆原稿については、新版『西田幾多郎全集』に掲載の写真及びウェブサイト上で「京都学派アーカイブ」（科学研究費プロジェクト「西田哲学・田邊哲学のテキスト生成研究」〔研究課題番号：22652008〕、「京都学派の思想史における史料学的アプローチ」〔研究課題番号：26580013〕と京都大学文学研究科〔情報・史料学専修〕による運営。管理者は両プロジェクトの代表で同学情報・史料学専修主任の林晋氏）として公開されている写真史料を参照した。「な」「ら」「る」「れ」といった特徴的な仮名文字や、くずし字「に」の形体が一致する。

（7）武内義範『教行信証の哲学』は「化身土巻」の「三願転入の問題」を主軸に深い洞察のもと考究された書。田辺元『懺悔道の哲学』や三木清の遺稿「親鸞」など、西田と同時代の親鸞論へ多大な影響を与えたとされるが、寸心荘蔵書の献呈本を見る限り、西田が同書を読み込んだ形跡は確認できない。なお、同書の三木「親鸞」への影響については、岩田文昭『近代仏教と青年――近角常観とその時代』（岩波書店、二〇一四年）の第一二章「宗教と哲学――三木清の宗教哲学」に詳しい。